

確かにジョージ・ブッシュは自分が先頭に立って世界の資本主義システムを支えているつもりでいる。世界の左派も大半がそう考えているに違いない。大資本家たちも同じように考えているだろうか。決してそんなことはない。

世界をリードする投資関連企業の一つであるモルガン・スタンレー社が、自社サイトの「グローバル経済フォーラム」で重要な警告を出した。「アメリカ中心の世界」では世界経済が立ちゆかなくなり、特にアメリカ経済に悪い影響をあたえると、主席分析官のステイブン・ローチが書いている。

ネオコンの知性派として著名なロバート・ケーガンを彼は槍玉にあげた。ケーガンは、ヘゲモニーを握るアメリカの力がますます強くなり、とりわけヨーロッパに及ぼす力が大きくなると主張している。ローチはこれを真つ向から否定する。世界「資本主義」システムが「深刻な不均衡」に陥っており、この不均衡が続くことはありえないと考えている。

分析をよく見てみよう。(デフレや不況という表現をたくみに避けて)世界は一九八二年から二二年にかけて「長期の逆インフレ」にあつたという。世界経済をリードするアメリカ経済の地位にゆるぎはないと褒め称えるのが世間の常だつた。それに比べると、ローチの評価は健全である。彼は次のように述べる。

# 帝国と資本家たち

今、ここ最近の不均衡が元に戻ろうとしている。つまりアメリカが突出したために崩れた世界のバランスはやがて回復する。なぜバランスが崩れたのか。第一の要因をあげる。

アメリカと他の国々とのあいだで対外収支の差が開き続いている。アメリカは、すでに枯渇しかかっている国内貯蓄を食いつぶして「巨大な赤字をさらに膨らませ」、他の諸国は平均より低い消費傾向にとどまる「大きな黒字をさらに増やす」。

とすると、バランスは悪くなるばかりだ。そして第二の要因がある。圧倒的に優位な軍事力を増強しつづけるためには莫大な経費がかかる。アメリカ経済は負担に耐えられるだろうか。私の答えは断じてノーだ。

結果として何が起るのか。「ドル建ての資産は、ドル建て以外の資産と比べて」価値を落とすことになる。つまり、ドルがまもなく暴落するという。

実質実効為替レートが二%下落し、通常の名目為替レートは四〇%ちかく下がる。実質金利が上がって国内需要が鈍り、国外の成長が速くなる。

と、予測して、次のように論説を結んでいる。

世界は決してグローバル経済として機能していかない(ローチにかかると、グローバルゼーションの論客たちも形なしだ)。……アメリカにかたよつた世界経済がバランスを取り戻すには、ドルの価値を急激に落とすしかない(1)。手短かにいえば、ローチの考えはこつだ。

肩で風を切るブッシュ政権のマッチョな軍国主義で、世界を思いどおりに作り変えるというタカ派の夢は、実現が不可能だ。そもそもモルガン・スタンレー社の顧客つまりアメリカの大投資家たちの目に、忌まわしいことだと映っている。

ローチの考えは完全に正しい。左派の学者がこう言っているのではなく、大資本の内部にいる人間が発言していることに注目すべきである。

「(1)アメリカの膨大な対外赤字と軍事支出のために、世界は不均衡に陥つた。ローチによると、ナスダックのイーバブルという不均衡の時と同じように、現在の不均衡を解消する鍵は金融市場が握っているという。過大に評価されてきたドルが適正な値まで下落すれば、アメリカの対外赤字は実質的に消えて、バランスは回復へ向かう。しかし、マクロな経済変動が何年もつづき、金融市場に深刻な影響を与える。日本とEUは、為替レートの激変で輸出に苦しみ、アメリカから買った国債・社債・証券などのドル建て資産がすべて急落するため大きな損失を被る。」

もつと長期の展望をもつて、いまの状況について考えてみよう。

近代世界システムにはいつも二つの勢力があり、五〇〇年の緊張した関係が続いている。一つは資本家階級の利益を守りたいと考え人びとの勢力で、彼らは世界経済がつまく機能するように努力する。政治暴盤を守るために、ヘゲモニーを維持するが、世界帝国を築こうとはしない。もう一つは世界システムを世界帝国に変えたいと願う人びとである。

歴史上、近代世界システムは、世界帝国を求める人びとからの挑戦を過去に三回経験している。一六世紀のカルル五世からフェルディナント二世「につづく神聖ローマ皇帝」、一九世紀初頭のナポレオン、そして二〇世紀のヒトラーだった。

いずれの試みも、一時は目覚ましい成功をおさめるが、彼らの野望はやがて打ち砕かれた。そして、挑戦に対抗する同盟を組織した当時の勢力が、その後の世界システムにおけるヘゲモニーを獲得している。順に、ネーデルラント連邦共和国(2)、大ブリテン及びアイルランド連合王国(3)、そしてアメリカ合衆国である。

イマニュエル・ウォーラーステイン 1930年生まれ。社会学者。ニューヨーク州立大学ビンガムトン校付属フエルナン・ブローデル・センターの所長を務めている。「近代世界システム論」提唱者。

翻訳・訳注 / 安濃一樹・別処珠樹 (ヤバーナ社会フォーラム <http://www.kcn.ne.jp/gauss/jsf/index.html>) ( )は原文の挿入語句、[ ]は訳文の補助語句、【 】は訳者による注釈。【4】のみ山下範久による。Immanuel Wallerstein, "Empire and the Capitalists," Commentary No.113 (May 15, 2003) <http://fbc.binghamton.edu/113en.htm> 著作権 / (2003年) 原文に関するすべての権利はイマニュエル・ウォーラーステイン本人にある。翻訳および記事掲載に際しては、本人の許可を得た。

【2】通称オランダ。カール五世（スペイン皇帝カレル五世）は、ネーデルラント（現在のオランダ・ベルギー・ルクセンブルクと北フランスの一部をふくむ地域）をスペイン皇帝の相続地とした。しかし北部七地方の勢力が同盟を結んで独立を宣言。連合共和国と称した。八〇年におよぶ独立戦争を経て、世界経済の中心となった。

【3】通称イギリス。ナポレオンをワテルロー（一八一五年）に破り、世界システムのヘゲモニーを獲得してゆく連合王国は、当時アイルランド全島を支配併合していた。

### ヘゲモニーは、勇猛な軍国主義によって支えられるものではなく、効率のよい経済が初めて成り立つ。世界システムを円滑に機能させるには、それに適した世界秩序を作り上げる必要がある。秩序の構築に成功した勢力がヘゲモニーを獲得する。ヘゲモニー国は世界システムの中心となり、この一極にきわめて有利な割合で資本が蓄積される。

アメリカは、一九四五年から七〇年ごろまでヘゲモニー国として利益を享受していたが、それ以降は優位を失いつづけている。

衰退へとむかう流れを逆転させようとして、米タカ派とブッシュの政権が世界帝国への道を選択したとき、彼らは世界へ向けたはずの拳銃で自分の足を撃ち抜いてしまった。アメリカを撃ち、ここに本拠を置く資本家たちを撃った。

まだ傷の痛みを感じていないにしても、もつすぐ取り返しのことかない深手を負ったことを知るだろう。まさにこの危機について、ローチは警告し、不満をぶつけている。



イラストレーション / 吉間ユカリ

ブッシュ政権は資本家たちの利益になるように、巨額の税金を払い戻すなど何でもしてきたではないかと言われるかもしれない。だが、資本家たちがそれで喜んだだろうか。

大投資家のウォーレン・バフェットやジョージ・ソロスは違う。ビル・ゲイツも（彼の父親の話によると）ありがたがりではなかった。資本家たちが本当に求めているのは安定した資本主義のシステムである。しかしブッシュはこの願いに応えようとしなない。

そのつちに、不満をつのらせた資本家たちが行動をおこす。いや、もう始めているだろうか。もちろん、彼らの抵抗が必ずうまくゆくとは限らない。二〇〇四年にブッ

シユが再選を果たし、「狂気」に駆られたような政治・経済政策を推し進めるかもしれない。そして、彼の変革が覆されないよう「法令や制度を確立しよう」と「画策」してくるだろう。

資本主義のシステムには市場という存在がある。市場はけっして全能ではないけれど、まったく力がないわけでもない。ドルが暴落すれば、そして必ず暴落するのだが、ジオポリティクス【4】の上で劇的な変化が起こる。アルカイダが世界貿易センターを攻撃したことから受けた衝撃よりも、ドルの暴落から受ける衝撃の方が大きなものとなる。

【4】ジオポリティクスという言葉は、通常は地政学と訳され、特定の地理的な空間を条件として展開するパワーゲームに注目する政治分析を指すが、世界システム論においては、資本主義世界経済というひとつの空間的な実体を条件として、そのなかで展開する大國間の政治的・軍事的抗争のダイナミクスを指す。（この注のみ山下範久）

アメリカは、あの大事業をみごとく乗り越えてみせたが、ドルの暴落により、アメリカの姿は一変するだろう。アメリカは、自分の収入にとても見合わない優雅な生活を続けてきた。それがもうできなくなる。好きなだけ消費を楽しんで、勘定は世界の国々に払わせていた。そんな日はもう戻らない。

IMF（国際通貨基金）から構造改革を強要されて、第三世界の人びとが味わったことを、アメリカ市民も身にしみて体験するようになるかもしれない。生活水準の急激な低下である。

今でさえ、全米の州政府が軒並み財政破綻の危機に瀕している。次に何がやってくるかをあらかじめ教えてくれているかのようだ。こうしてアメリカ経済の基調がぐずれ始めたときに、ブッシュ政権はあらゆる手を尽くし、自ら求めて最悪の事態へと突き進んでいった。いつか歴史書にそう書き留められることになる。

（時事評論第一二二二〇〇三年五月二五日）